

れたものと考えられていたことが、判明する。

角川書店の『古語大辞典』の「つくしのわた」の説明によると、「筑紫から産出する真綿（まわた）。

古代の綿は木綿（きわた）ではない。古くから品質のすぐれたものと考えられていたらしい。『始めて毎年、大宰府の綿二十万屯を運びて以て京に輸さしむ』（続紀、神護景雲三年）はこれであり、平城宮出土の木簡にも北九州を中心に綿を調として納めた贄付札が多く（下略）」とある。

このことについて、さらに時代は遡るが八世紀の「大宰の綿」について詳細に言及したものとして『県史 福岡県の歴史』（山川出版社）がある。以下に関連する箇所を抜粋して紹介する。

▼奈良時代の綿は真綿のことで絹綿・繭綿ともいい、蚕の繭からとったものである。八世紀での西海道調庸の綿（大宰綿）の財政的意味を中心に次にまとめよう。

一つは、八世紀を通じて大量な大宰綿が京進されたこと。天平元（七二九）年九月に調綿十万屯の京進が義務付けられ、それは約四十年間続いたらしく、神護景雲三（七六九）年三月には二十万屯に倍増された。八世紀末になると半減、九世紀初めには隔年貢進となるが、『延喜式』でも綿や貢綿使の記載があり、平安時代中期に至るまで原則はあくまで綿だったといわれる。（中略）三つ目に八世紀での京進分の綿は

西海道調庸綿総生産量のうち、どれくらい割合だったのか。試算されている結果をさらに推定すると、七十年代に二十万屯の総生産量に対して十万屯の京進分、七十年代には四十万屯の総生産量に対して二十万屯の京進分となる。四つに一袋百屯の重さは約二十二・五キロと試算されている。つまり京進分二十万屯とは一袋（百屯）≡約二十二・五キロの綿が年間二千袋京進されたことになり、貢綿使の郡司・郡司子弟二十人らによって管理・運搬されたい。 （中略）五つに、だとすれば、京進分を差し引いた残